

★海外文献紹介★

「霧の中を見通す
—子どもの本の将来—」

by J. R. Townsend

The Horn Book Magazine

June 1977.

英国のように児童文学においても、古くからの伝統を持たなかつた米国は、出版界、図書館界等の組織的活動の努力によって、児童文学を確立させて来たと言われる。一九二四年に発刊が始められた米国の児童文学書評雑誌『Horn Book』もそれらの活動のひとつである。毎号『ホーン・ブック』の表紙を飾る絵（高らかに角笛を吹き鳴らしながら、勢い良く先駆けてゆく馬上の三人の男）が象徴するかのように、子どもの本の進むべき方向を示し、その啓蒙、更に研究に大きい役割を果して来ている。

ここでは、評論家、児童文学作家として、本国英国はもとより、幅広く活躍しているタウンゼンド氏が、『ホーン・ブック』に載せている「霧の中を見通す」という論文を紹介し、児童文学の

将来について考える糸口としたいと思う。

一 子どもの文学の現状

タウンゼンドは、子どもの文学の未来を見通す前に、それが置かれている現在の状況を、今一度確かめる必要があると考える。そして、子どもの文学の現状に関して、それぞれ異なる見解を持つている三つの集団を紹介する。

そのひとつは、作家、出版者、評論家、公共図書館員等の、本に職業的に関係している人々で、彼はこの人達を「本人」(Book people)と呼ぶ。

第二のグループは、両親、先生、学校図書館員等の、子どもに關っている人々を指し、彼等は「子ども人」(child people)と呼ばれる。

本人にとって、本が仕事であるのだから、情況の中心にあるものは本である。子ども人にとっては、中心にあるものは子どもである。子ども人は、子どもの全体的成長に關心を持っており、本はその中のたった一要素に過ぎない。つまり子ども人は、本の文学的長所の評価や、子どもの本の地図の何処にその本が位置するかよりも、むしろ本が子どもにとってどんな影響を与えるかにかまらず興味がある。

本人の立場から現状を見ると、「今日程、子どもの為の多くの興味をそそる本が出ていた時はなかった。かつてなかった程、子どもの本の多くの有能な作家や美術家に恵まれ、本の広い選択が可能であり、すべて好調である」と言えるであろう。

これに対して子ども人の立場からは、次のような反対の意見が出るであろう。「大部分の子どもは、本人の述べたような、興味をそそる多くの本を読まない。子どもの多くは、全く楽しんで読書をしたくないし、又、しても確なものしか読まず、すべて好調でない」と。同じ状況に関しての、この二つの全く異なる見解は、それぞれの立場において両方正しいとタウンゼンドは述べる。

今日、本人でも子どもでもない第三のグループがある。彼はこれを「目的人」(cause people)と呼ぶ。目的人にとって情況の中心にあるものは、本でも子どもでもなく、ある本が、彼等の持っている目的を前進させるか否かである。即、本は人種、性差別撤廃等の目的達成の為の方法である。そして目的人は、現状が良好であると考えていない。

タウンゼンド自身は、子の親だから、ある点では子ども人であるし、人種、性差別に反対だから、ある点では謙虚な目的人である。しかし結局は、本人であるという立場をとり、現状に対して、かなり好調にいつているという楽観的な見方をし、その根拠

について次のように述べてゆく。

今日、最上の子どもの本は、高い価値があるし、人種、性差別もなく、馬鹿げていないし、難しくもない。又、本を読まない子どもがいるという現状に対しても悲観的になるべきではない。百パーセントの子どもの本を読まなくても、そういう子もいていいと認めるべきである。

ただ、どの子どもにも、丁度、すべての子どもが音楽、スポーツ、屋外での遊び、劇等を紹介されると同じように、本を楽しむ機会を与えられるべきである。それでも子どもが本を楽しまないなら、押し付けるのは止めるべきで、彼等に罪悪感を与えることは避けなければならない。

現在、子どもに本を手渡す試みは進歩しつつあり、学校、図書館、家庭でかなりの程度まで達成されている。子どもの本が、今、高い水準にあることが、教師、学生(特に教員養成大学において)、両親、そして職業的に本に関係している大人に、子どもの本が関心を払うに足るものであることを自覚させた。その結果子どもの本のグループがあちこちに生まれ、広がっているという事実は勇気付けられることである。

子どもの為のペーパーバック出版の拡大が、英米において最近著しく貢献している。例えばパフィン・ブック(ペンギンのジュ

ニア版)の年間の売上げを見てみよう。一九六〇年代初には一〇〇万部、一九七三年は六七五万部、一九七五年は出版が後退した年であるにもかかわらず九五〇万部に達している。パフィンの方法が、多く売れると予想される市場向けの本を選ぶのでなく、質の良い本を選択していることは、最上の質の本を作るべきであるというタウンゼンドの信条とも通ずる所である。

二 子どもの文学の未来

現状を踏まえたタウンゼンドは、次に子ども本の未来について展望してゆく。将来を見通そうとする時、私達は、手探りの暗闇—経済的、技術的な霧に包まれている。

何年前から、子どもの為の質の高い本の出版は、浮き沈みはあっても経済的に良い事業だった。しかし、ここ数年、図書館市場も、堅実な支えではないことがわかって来た。本の価格暴騰や、予算据置や削減があると、出版や再版される本の部数は少なくなるだろう。そうしなければ、どの本も売れなくなるから。二、三年前、ある子ども本の本の出版者が、中級の上にいる作家にとって困難な時代が来ると話していた。今やこの困難な時代に入ったのであり、これからも続くと思われる。しかし困難な時代は、今まで多過ぎる程、本目録に載ったまずい本のような、余分

の枝を切り落とすことはするだろう。

近年、英米では出版社の合併、吸収が進んでいる。これは、経済の専門家が本人の間へ、単に利益の拡大という目的のみで割込んで来ることを意味する。こういうビッグ・ビジネスの時代になると、特別の読者を求めたりするような、多く売れない良い本の出版が危険となってくる。この世紀を生き抜く為には、中小の出版社は素早く頭を働かせて、賢く生きてゆかねばならない。

彼は、次に文学的な最近の傾向に触れてゆく。近年、年長の讀者の為の小説や、小さい子どもにとつての絵本は隆盛である。しかし、その中間のグループ(八—十一歳の子ども)は、編集者の努力にもかかわらず、それらの創造的才能の分け前を得ていない。その理由は、前者の為には、作家は自身を自由に表現可能である。しかし、後者(中間のグループ)の為には、絵本ではもう大きくなり過ぎていて、人生や文学的経験、読書能力の限界という壁が作家の自由な表現を妨害している。この現状は今後も続くであろう。そして時々、その薄暗い雲が切れて、晴れることがあるとすれば、それは、善意の編集者の努力の結果ではなくて、予想できない、青天の霹靂のような本が現われることである。

年長の子どもの為のフィクションでは、米国ではいつもリアリスティックなものが主流を占め、英国ではファンタジーが最も関

心を集めている傾向にあり、これは今後も続くと思われ。

最後に、科学技術の問題について。本は、科学技術の進歩による、オーディオ・ビジュアルやビデオ・カセット等電子工学の時代の到来によって簡単に取って換わられるものではない。本はマス・メディアではなく、生産は比較的安価で、売れ行きが少なくとも持続可能という長所を持っている。子どもの本は、コンパクトで、個人的に親しみ易いので、世の趨勢が、大規模化、非個人化し、マス・プロの方向にある時代の中で、力強く生き残ろうとしている。

タウンゼンドは、こうして地平線の彼方に見えるいくつかの雲について見通して来た後で、子どもの本の将来の不安定さは、人生の他の点でのそれと比べれば小さいものであると述べる。そして次の一〇年間に大きな希望を託し、一九八〇、九〇年代も読書する子どもの絶えることはないと思われ、という明るい予想のもとにこの論文を締括している。

※ ※

折しも、私が本稿に取り掛かっていた二月二十二日、朝日講堂でタウンゼンドの講演会が催された。満員の聴衆の熱気の中で、彼は、"Looking Ahead from 1978"と題して講演した。その内容が、この論文とはほぼ重なるものであったが、今まで社会派的リ

アリズム作品を創作して来た彼が、二、三のファンタジーを手掛けていることが紹介された。このことは、彼によって語られなかった子どもの文学の未来への一方向を示しているのではないかと、大変興味深く思われた。

私はかつてから、彼が声高に叫ぶ論文や作品よりも、彼の意識の表に出て来ないが、しかし彼の作品に執拗なまでに繰返し繰返し顔を出して来る、原風景とも言えるあるイメージに心魅かれていた。それは、ジャングル街のシリーズや『アーノルドの激しい夏』に描かれ大切な役割を果すがンブル原っぱである。又、これは『北風の町の娘』にもハラスエージとして描かれる。隅っこ、凹的空間、洞窟そして母胎へと収斂してゆく、彼の奥深い所に入り、無意識のうちに彼を脅かし続けるこのイメージ。彼の語られない陰の部分ともいえるべきこのイメージは、ある意味では作品の原動力となっているとも言えよう。このイメージは、彼が今まで試みることのなかったファンタジーという自由な国において、充分に描かれることができたであろうか。ブレイクの詩からモチーフを得て作られたという『夜の森』(一九七四)や、未来を予想して描いたという『ノアの城』(一九七五)等のファンタジーにおいてどのように描かれているのだろうか。翻訳本を手に行ける日が待たれる。

(お茶の水女子大学 清水いく子)